

史料としての「編輯後記」

本号を以て、小誌『科学史研究』第II期シリーズは最終号となる。2014年から、既に公告文として掲載したとおり、出版元を日本科学史学会として第III期シリーズを開始する。

1941年の本学会創立以来、途中数年の中断はあったものの、70年近くにわたって刊行してきた小誌は、通番で268号を数えるに至った。ひとえに、この長きにわたり、小誌を支え続けていただいた読者諸氏、会員諸氏、先学諸賢、そして販売を担っていただいた岩波書店の関係各位のご尽力の賜物であることは言を俟たない。この場をお借りして厚く御礼の言葉を申し上げるとともに、今後もさらなる各方面からの御鞭撻をお願いしたい。

引き続き新シリーズ第III期の刊行を継続していく我々編集委員会にとって、しばしば言及される戒めである「初心忘るべからず」の言は、常に脳裏に去来する。そこで、小誌『科学史研究』という雑誌にとって初心とは何であろうかという問いを考え直してみる。自然な結論ではあるが、それは刊行開始直後の小誌の理念ということになるのであろう。

『科学史研究』は日本科学史学会の創設直後から刊行を開始している。その結果、たまたま小誌の1桁号(第1~9号)は、戦時中に発行することとなった。当時、編集に携わった会員関係者はどのような気持ちでこの雑誌を編集していたのか、戦後になって会員の何名かの証言による回顧録等もあるが、ここでは、当時の編集後記を原文のままに一覧列挙することで、『科学史研究』発刊当時の編集事情を回顧してみたい。

ともすれば、雑誌の編集後記はほとんど顧みられることのない埋め草的情報と見なされがちであるが、小誌『科学史研究』の歴史を辿る史料として、そしてこれまでの編集に携わった各位へのオマージュとして、以下の各号の編集後記を掲げたい。

なお、日本科学史学会の草創期の状況については、本会前会長・道家達将による総説記事「我が国の科学史」(1996年~1998年に『学術の動向』に連載された記事、http://historyofscience.jp/?page_id=877)による紹介がある。併せてご参照を頂ければ幸いである。

凡 例

- 以下、『科学史研究』第1号から第9号までの編集後記を、若干の註釈を付けて紹介する。
- 『科学史研究』第1号から第9号は、発行兼編輯者を日本科学史学会代表者・桑木彥雄とし、発行所は日本科学史学会、発売所を岩波書店としていた。
- 各号の総目次については、本会ホームページ(http://historyofscience.jp/?page_id=1118)を参照されたい。

『科学史研究』第1号

昭和16(1941)年12月29日発行/特価1円20銭/157ページ

編輯後記

桑木会長の「科学史の研究」¹⁾中にもあるやうに歐洲又はアメリカに於ける科学史研究は既に可成り以前から

始められてゐる。數年前のサートン氏の「アイシス」中に世界各國の科学史研究狀況が報ぜられてあり各國夫々の研究機關組織の述べられてある中に我國のものがあり、日本には何等研究機關も講座もないけれども僅かに桑木、林²⁾、富士川³⁾、三上⁴⁾等の個人的研究者のあることが報ぜられてあつた。今日こそ我々は大威張りでこの學會及びこの研究雑誌の存在を誇らかに報じてやることが出

来る。とに角このことは我々にとっては實に大いなる喜びである。

會報⁵⁾にもある通り、學會の成立までには仲々の苦勞があつたし、又この「會誌」を生み出すまでも一通り以上の努力が拂はれてゐる。七月頃會員諸賢に御通知した際には年内二冊發行の豫定であつたが、御承知の通り紙の配給は自由を欲し、あの後ではどうしても一冊しか出せないことになってしまつたのであつて、その點御諒承願ひたい。従つて會費⁶⁾よりも一冊の値の方が安いことになつてしまつた。之は必ず今後會員諸賢に何等かの形で補をつける必算である故、之も宜しく御許し願ひたい。

次號からは科學史に関する著書の紹介及び批判も活發に且權威を以つて實行したいし、諸文獻の報告も載せるつもりである。其他會員諸氏の種々の御意見なり御消息なりも載せることになるかもしれない。

會からのお願としては會費を正確に拂ひ込まれてほしいことと、眞に協力する意志のある新會員を紹介していただきたいことである。單に會誌の購讀者になりたい方は岩波書店に申込みたい。

1) 桑木彥雄「科學史の研究」, pp. 2 - 10.

桑木(1841-1945)は物理学者で日本科学史学会初代会長(1941-1945在任)。

2) 林鶴一(1873-1935)は東北帝国大学教授で、数学、和算史を研究。

3) 富士川游(1865-1940)は東洋大学教授等を歴任し、医学史を研究。

4) 三上義夫(1875-1950)は在野の和算史家。

5) この当時、日本科学史学会の會報は會誌の末尾に併記されていた。第1号の會報(p.155)には「この會が成立するまでの経緯を詳述することは省くが、ともかく成立までの世話人一同の努力は一方ならぬものがあつた。忙しい大切な研究や仕事をもつてゐるこれらの人たちが、できるかぎり時間を都合してたびたび會合し、具體案を練つて行つた。[中略]そしてまづ、[1941年の]三月三十一日、學士會館において發起人會を開催し、發會式の下準備が固められた」と記されている。發會式は4月22日、51名の参加を以て學士會館において舉行された。

6) 当時の「日本科学史学会會則」第6条によれば、「會員ハ會費トシテ年額金四圓ヲ納ム」とある。

『科学史研究』第2号

昭和17(1942)年5月29日發行/定価1円/138ページ

編輯後記

「科學史研究」の名も日本科學史學會の名も未だ十分には知られてゐない。始めてその様な學會があることを聞かされて是非入會したいがと熱心に申込みれる人、「科學史研究」が買ひたいが何處の本屋にあるかと問ひ合はせられる人が随分多い。雑誌を賣ることは昔の様には自由に行かないし、新聞の廣告は甚だしい制限のために殆ど目につく様には出せない。賣れなくても學會は少しも構はないのではあらうが、編輯に従事してゐるのは人情の點で不満を伴ふものである。しかも賣行が始めのうち思はしくなかつたのは人が知らないからであり、知らせる手段が實に制限されてゐるのだから、その齒痒さといつたらなかつた。ところが新聞にも紹介され、方々の廣告もボツボツ出るし、人づてに聞く人も數が増して、其後は實によく賣れて行つた。編輯子も始めて晴ればれした愉快さを味ふことが出來た。

本號の發刊が一ヶ月以上もおくれたことは申し譯ない。だんだんとはとりかへすつもりではあるけれども、會誌の内容の盛衰は、雑誌記者の原稿集めに依存するといふ賣るための科學雑誌ではないのであつて、日本科學史學會自體の研究が活發になれば従つて會誌も潑刺として來るわけであり、會員諸賢、又購讀者諸賢の御協力の如何が本誌を左右するのみである。と申して編輯者、役員¹⁾其他責任を廻避する心算ではなく、是非ともこの光輝ある會誌を發展させて行くために全力を盡してゐる。

本號から大矢眞一氏²⁾の努力によつて科學史の文獻目錄を掲載し始める。今後この方面のあらゆる文獻を片端しから片づけて行きたい。それには個人の蔵書の目錄の發表も學會として調査事業³⁾の中に入れてあるが、それが少しでも手に入り次第本誌上に發表して行くつもりである。

1) この当時、日本科学史学会では次の役員を置いていた。「会長」「委員」(一部を「常務委員」とする)「幹事」「顧問」。

2) 大矢眞一(1907-1991)は戦後、富士短期大学教授を務めた和算史家。

3) 当時の「日本科学史学会會則」第4条には、学会が行う事業として以下の9つを挙げていた。

1 「年會(總會ヲ兼ヌ)ヲ開ク」

2 「毎月一回例會ヲ開ク」

3 「特殊部門ニ關スル分科會ノ設置」

4 「研究機關雜誌「科學史研究」ノ定期(年四回)發行」

5 「公開講演會及史料展覽會ノ開催」

6 「文獻目錄、覆刻、解説、著譯ノ編纂及出版」

- 7 「科學史圖書館ノ設立」
- 8 「科學史研究調査ノタメ會員ノ内地及海外派遣」
- 9 「其他必要ト認メタル諸事業」

『科学史研究』第3号

昭和17(1942)年11月5日発行/定価1円/150ページ

編輯後記

- ◇科學史研究が科學振興の波にのつて急に流行し始めたのは三四年此方のことであり、近頃ではむしろ下火になつて行く様子だ。勿論このはやりものの科學史研究の雜多な論説、著作の中にはなるべく早く退場していたゞきたいものもあり、さうかと思へば實に立派な力作があつたりして誠に玉石混淆ではあつたりが、本誌の出現はそれに少なくとも一つの示標を與へ「科學史研究はかくあるべし」と云ふ理念を、研究者にもまたその讀者にも教へて來ることに役立つものと信じてゐる。そして流行が下火になつて行く頃になつてはじめて本物がのこるのだらう。それは研究者ばかりではなく、所謂ファンに殊に著しい現象である。
- ◇「科學史研究」創刊の當時は、この機關雜誌を利用してあれもやりたい、これもやりたいと考へた、否今でも種々と考へてゐるけれども、個人の研究發表はその當人さへやれば濟むことだが、學會の爲めの事務的、編纂的の仕事となると何を措いても人手がないし、やゝ大規模にと考へれば金がない。文字通り多忙々に日夜を送つてゐる多くの人を、之以上勞力奉仕させることは中々に困難である。毎月の本誌の内容が見事なのはこの個人研究の成果のみによつてといふことも、實を云へば余自體の綜合的の仕事がそれよりも遅れ勝ちであることを白狀してゐるわけである。
- ◇本號から二段組を多くした。紙の儉約のためである。毎月豫定の百頁をはるかに超えるのでやむを得ずしたのであるが、時局下止むを得まい。來月號は四號五號の合併號として、科學史研究の論文(本年度)及び單行本の文獻目録を掲載する。勿論古いものもそのままつゞけて行くつもりである。更に會員名簿ものせたい所存であるが頁數の関係上未だ決定的には申上られない。發行遅延については編輯部は全く申譯ないこととお詫するばかりである。

- 1) この第3号の「会報」(p.148)には同趣旨の文章が記されている。「我科學史學會が誕生してからといふものは、一般にも科學史の研究はとみに活潑になつてきた様に思はれる。[中略]これは大いに喜ぶ

べき事であるが、併しまだなかにはいかゞほしいものや首肯しかねるもののある事は遺憾である。學會は、これらのものに對するよき忠告と助言を決して惜しまないであらう。」具体的にどのようなものを指して「なるべく早く退場していたゞきたいもの」や「首肯しかねるもの」と述べられているかは不明である。

『科学史研究』第4号・第5号(合併号)

昭和18(1943)年1月28日発行/定価1円/197ページ

編輯後記

- ◇前號でお約束した通りに、本號は四・五合併號としてお贈りする。どうも合併號と云ふ手段は少々後めたい氣もするけれども、元來百頁の豫定であつた本誌が每號百五十頁になつてしまつた爲、經費の點から云つても約五割の超加となつてゐた。従つて豫定の費用をはるかに越えてしまひ、どうしてもこの様な手段でそれを補ふと共に、時間的な遅れをも取りかへさうと云ふわけであつて、どうか會員及び讀者諸兄の御諒承をお願いしたい。しかも紙は本年度からは更に紙面の儉約を考へて行かなければならないから、どうかそのことも豫め御了解願ひたい。
- ◇本號は元來昭和十七年の分であるので、年内に仕上げる豫定でゐたけれども之も種々と遅れる原因を生じてしまひ、昭和十八年の年頭の賀詞を本號上で申上ぐることになつた。編輯子も一寸御挨拶の辭に困つてゐる。
- ◇會員名簿を載せたが、之も相當に不満足なものになつてしまつた。會員の専攻を一つ一つ明記して會員相互間の研究交換の便に供したいのではあつたが、會の方へ何等それについてはお知らせいただけない方が相當にある。職業なども御變更のためこの名簿と一致しないものや、當方の手ちがひのため誤まつたものなどはどうかお知らせ願ひたい。
- ◇本誌は各書店の店頭には陳列してないので、よく學會直接にお申込があるけれども、會員以外へは學會からお賣りするのには正當ではないので、本誌だけ講[ママ]讀御希望の方は地方ならばどうか岩波書店の通信販賣部へ申込まれたいし、東京ならば岩波書店の小賣部へ行かれ、ば手に入る筈である。

『科学史研究』第6号

昭和18(1943)年6月28日発行/定価1円/69ページ

編輯後記

- ◇本號も年半ば過ぎて漸く發行に至りました。しかも本

號から第三巻に入ります。今後出来るだけこのおくれをとりかへすやう努力してをりますから何卒御了承下さい。

- ◇狩野先生¹⁾については八田氏に特にお願ひして執筆していた²⁾ので、この點お禮を申し上げねばなりません。但し掲載した寫眞は岩波書店の小林勇氏所蔵のものを拝借したのです。先生は寫眞が大嫌ひだつたさうですが、その先生を巧みに納得させ同氏が先生と並んで寫した非常に珍らしいものです。小林氏の御厚意をも感謝します。

これは編輯子として悲しむべきことですが、次號には藤浪先生³⁾の追憶も載せられませう。それに平山先生⁴⁾の追憶も掲げねばなりません。

- ◇本號は大分薄くなつた様に思はれるでせう。しかし平均して百頁位になるやうに調節しないと、經費の關係上相當な困難が生じて來ますので、この様にいたしました。更にその上本號から僅かではありますが特別行為税相當額⁵⁾を讀者諸氏に御負擔願はねばならなくなりました。之も不悪御了承下さい。
- ◇用紙不足の折から、本誌がかうして相當な部数を維持してやつて行けるのは科學史研究の意義が一般に十分認められてゐるからであります。しかし猶それをして一層有意義ならしめるために會員、讀者諸賢、編輯子一體となつて益々努力いたしたいと思ひます。讀者諸賢の御研究がありましたならば一應拝見の上適當なものはどしどし誌上に掲載したいと思ひます。また本誌に對して種々の御註文があれば御遠慮なく御申越下さるやう願ひ上げます。
- ◇會報にもある通り、今年度から會費が六圓になりました。⁶⁾諸種の費用が高んで來て止むを得ないことなので、何卒御了承の上お忘れなく納入していただくやうに願ひいたします。

- 1) 狩野亨吉(1865-1942)は第一高等学校校長等を歴任した教育者、歴史家。
- 2) 八田三喜「狩野亨吉先生」, pp. 32-38.
- 3) 藤浪剛一(1880-1942)は慶應義塾大学教授を務めた医学者、医学史家。
- 4) 平山清次(1874-1943)は東京帝国大学教授を務めた天文学者。
- 5) 特別行為税は昭和18年に導入されたもので、「消費の節約、購買力の吸収等を目的とし、「特別行為」にかかる費用額の2~3割を徴税した」もので、課税対象は「1「写真撮影」(現像、焼付け、複写も含む。), 2「調髪及整容」(パーマや髪のカット等), 3「織物及び被服の染色及び刺繍」, 4「被服類の仕立

て」, 5「書画の表装」, 6「印刷、製本」(ただし、公共団体や神社、学校のためのものなどは除く。)であった。昭和21年に廃止。引用は国税庁のメールマガジン第12号(平成18年)(http://www.nta.go.jp/merumaga/backnumber/2006/06_06.htm)より。

- 6) 第6号本文の「會報」(p. 67)によれば、「昭和十八年度から會費を一ヶ年六圓(従來は四圓)とすることに決定された。」とある。

『科学史研究』第7号

昭和18(1943)年11月28日発行/定価1円/109ページ

編輯後記

- ◇印刷所は今戦場のやうな忙しさに加へて、あらゆる事務が速かには進行し得ないといふ種々の悪条件その他のために學界の雑誌は定期的な發行に益々困難を感じるやうになつた。しかし會報にもある通り¹⁾、この重大なる時局下に本會が存續し得ること、従つて本誌を發行し得るといふことに對しては眞の國家的自覺をもたなければなるまい。
- ◇本誌の編輯は従來平田幹事²⁾及び稻沼³⁾があたつてゐたが、今回平井幹事⁴⁾をも加へて事務的處理を行ふと共に、今後更に一段と積極的な編輯を行はうとすることになつた。會員諸賢の一層の御協力をお願いする次第であるが、どうか御遠慮なく御投稿願ひたいものである。投稿規定として別にやかましいことは申し上げないし、原稿用紙などは何でも差支へないが紙面の都合や發行の時期等もあるので採否は當方に一任願ひたい。またこちらから題目なり要旨なりを定めてどしどし御依頼するつもりであるので、どうかその節はよろしく願ひする。掲載の玉稿に對しては原稿料として細かく計算はせず、謝禮をお送りすることになつてゐるが、今後出来るだけ十分にいたしたいと考へてゐる。
- ◇會員外で講讀希望の方は直接學會事務所や岩波書店へ申込まれても現在の配給規程ではお送り出来かねる。しかし全國の小賣書店で必ず申込は受けつける筈であり、東京附近の方は岩波書店小賣部で必ず買へるやうに手筈してある。もしそれらの點で故障があれば岩波書店内の編輯部にその旨を申越され、必ず手配の上、お手に入るやう努力するつもりである。
- ◇次號には會員住所録を附したいと思ふので、前の住所その他變更の點至急お知らせいただきたい。

- 1) 第7号の「會報」(p. 108.)欄に、「この重大な決戦下に本會が研究と事業を繼續し得るといふことに對して、われわれはなほ一層の國家的自覺をもつて、

科学史研究を遂行しなければならぬ。新しい民族的確信の鼓吹や、科学技術の創意への示唆や、失敗を繰返さぬための反省は、今日この領域における主要な責務である。われわれは今後いよいよこれらの意圖を、明確に本會の事業に注入してゆきたい」とある。

- 2) 平田寛(1910-1994)は早稲田大学教授を務めた、古代科学史家。
- 3) 稲沼瑞穂(1908-1965)は戦後、岩波書店の編集者を務めた。
- 4) 平井昌夫。平井は、第9号掲載の名簿によると、「春陽堂書店」の勤務。

『科学史研究』第8号

昭和19(1944)年5月28日発行/定価1円/80ページ

編輯後記

- ◇ 會報にもある通り¹⁾、本誌は雑誌整備の結果特殊雑誌として従來の使命を果すことを許されることになった。編輯にたつさはる我々はこの當局の理解ある措置に對して滿腔の謝意を拂ふと共に今後新たに課せられた重大な使命遂行のために邁進しなければならぬことを痛切に感じてゐる。
- ◇ しかしながら本誌は學會と一體であつて、獨り本誌のみが獨立に戦時下にふさはしい活動を開始すると云ふことは不可能である。即ち學會の委員會に於て決議された通り²⁾、今後戦争遂行に直接間接關係ある諸問題について我々が自ら進んで問題を取りあげて行き、過去を現在に生かして用ひ得るやう、また更に現在の事情の歴史的進展をそのまま、科學史的に検討して行くこともしなければならぬ。そしてこれらの問題がとり上げられ論ぜられるやうになれば、本誌がそれと共に活氣を呈して來るであらう。
- ◇ 現に本誌に寄書として以上の如き問題を扱つたものが三篇も載せられた。³⁾これを導火線として、どうか會員及び讀者諸賢もどしどしこれらの問題について御意見を寄せられたい。
- ◇ ところで紙の配給はますます減少することにならう。従つて今後どんな状態になるか一寸豫想もつきかねるのであるが、とに角かなり薄い雑誌になつてしまふかもしれない。しかし他の學會誌が續くかぎり本誌もつゞけて行くことだけは約束出來よう。
- ◇ 本誌に會員名簿を掲載する豫定であつたにも拘らず調査の人手が不足で間に合はなかつた。次號には是非載せたいと考へてゐる。異動のあつた方はどうか御知らせを願ひたい。(M)⁴⁾

- 1) 同号「會報」(p.189.)に、「本會の機關誌であり科學史研究の指導雑誌とも云へる本誌が三月十一日附をもつて出版會から職能雑誌・科學雑誌部門・特殊雑誌として存置されることに決定し、速かに統合強化とその編輯組織の確立を要請された」とある。
- 2) 同じく「會報」に、「本會の研究も決戦下の我國に何等か直接的な役に立つものでありたいと誰しも切實に念願してゐる。二月二十二日には委員會を開催して、特にこの點につき協議し、今後毎月二十二日毎例会又は委員會を開き、戦争遂行のため科學的見地から種々の材料をもちよつて、互に意見を發表し合ふことに定めた」とある。一方、昭和19年開催の2度の例会について見ると、2回とも参加者は10名程度で、會報の記者は「例会出席者が次第に減じて行つたことは心細いことであるが、この頃の東京に於ける極度の食事の不自由さの結果であり、残念ではあるがまことに止むを得ない事と思はれる」(p.190)と記している。
- 3) ここに述べられている3つの寄書とは、下記の論考を指している。
天野清「戦時に於ける科學・技術史」, pp.71-72.
湯淺明「第一次歐州大戰中のドイツの細胞學」, pp.73-74.
田中實「戦争と科學についての斷片」, pp.75-78.
- 4) この号の編集後記にのみ執筆者のイニシアル表記があるが、稲沼瑞穂のことと思われる。

『科学史研究』第9号

昭和20(1945)年5月28日発行/定価1円/112ページ

編輯後記

- ◇ 焼夷弾の火焰を一度くぐつた第九號を會員諸氏にお贈りする。執筆者にとつてはかけがへのない貴重な之だけの原稿が幸ひ金庫内に保存されてゐたため、何等の損傷を受けずに、かうしてもう一度印刷に掛けることの出來たことは有難いと云ふほかはない。しかし不幸にも従來の印刷所は災害を蒙つたため、新しい印刷所に依頼することとなつた¹⁾のであるが、その組版印刷發行と云ふ段取りが益々苦しくなることは御想像以上である。
- ◇ その意味でこの種の雑誌が何日まで刊行し得るかは不明であり、當然東京の空襲激化と共に一時的には中止に至るものと考へられる。次號が讀者諸氏のお手許に達する時は日本がどんな状態にあるかさへ見當がつかない。²⁾
- ◇ とに角本誌もかく取り揃へた。研究對象としては古いものが多く、戦時下の科學研究を科學史的觀點からつ

かまへようと云ふ編輯方針にも拘らず、左様の論文が中々出来上らない。之はいたし方のないことで、事實あらゆる科学研究者が動員し盡されている現在、之等の人々にその研究をまとめることさへお願いいたしかねる有様なのである。

◇たゞ木村駿吉博士の海軍に於ける無線電信機工夫の苦心談を海軍当局の御了解を得て資料として掲載したことは唯一の誇りでもある³⁾。之は會員杉田元宜氏の御好意によるものである。恐らくこの様な苦心談は現在同様に苦心惨憺してゐられる研究者のよき指針ともなり、奨励ともなるであらう。何年か後、現在の研究者達が木村博士と同様な懐古談を語り、我が優秀なる獨創的兵器の發明過程を述べる時が来るであらう。

◇やうやく會員名簿を整理して、本號に附することが出

來た。⁴⁾自然科学の各分野に亘るばかりでなく其他の方面の學者をさへ含めてゐる本會の名簿は、ある意味では我國文化の縮圖であると共にまた一方極めて便利なものであらう。

- 1) 第8号までの印刷所は三秀舎であったが、この号は大日本印刷株式会社となっている。
- 2) この後、『科学史研究』第10号が復活刊行されるのは戦後、昭和24(1949)年のことであつた。
- 3) 木村駿吉氏述「日本海軍初期無線電信思出談」, pp. 75-97.
- 4) 第9号, pp. 99-112.

(佐藤賢一)

編集後記

2013年冬号をお届けします。今号を以て、長きにわたって販売をお願いしていた岩波書店様からの最終刊行号となります。あらためて関係各位への御礼を、この場を借りて申し上げます。既にお伝えしています通り次号

からは日本科学史学会の販売として第III期の刊行を開始いたします。『科学史研究』のこれまでの編集内容に加え、特集記事・研究情報のさらなる充実を図るべく、現在、刊行準備を進めております。今後も皆様の変わらぬご愛読を頂きますよう、努めてまいる所存です。

(佐藤賢一)

〈科学史研究 編集委員〉 委員長 佐藤賢一

委員 有賀暢迪 梶 雅範 小林 学 坂本邦暢 住田朋久 瀬戸口明久
田口直樹 兵藤友博 松原洋子 水沢 光

複写される方へ

本会は下記協会に複写に関する権利委託をしていますので、本誌に掲載された著作物を複写したい方は、同協会より許諾を受けて複写して下さい。但し公益社団法人日本複製権センター(同協会より権利を再委託)と包括複写許諾契約を締結されている企業の社員による社内利用目的の複写はその必要はありません。(社外頒布用の複写は許諾が必要です。)

権利委託先：一般社団法人学術著作権協会

〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル

電話(03)3475-5618 FAX(03)3475-5619

E-mail : info@jaacc.jp

なお、著作物の転載・翻訳のような、複写以外の許諾は、学術著作権協会では扱っていませんので、直接発行団体へご連絡ください。

また、アメリカ合衆国において本書を複写したい場合は、次の団体に連絡して下さい。

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA

Phone 1-978-750-8400 FAX 1-978-646-8600

Notice for Photocopying

If you wish to photocopy any work of this publication, you have to get permission from the following organization to which licensing of copyright clearance is delegated by the copyright owner.

〈All users except those in USA〉

Japan Academic Association for Copyright Clearance, Inc. (JAACC)

6-41 Akasaka 9-chome, Minato-ku, Tokyo 107-0052 Japan

Phone 81-3-3475-5618 FAX 81-3-3475-5619

E-mail : info@jaacc.jp

〈Users in USA〉

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA

Phone 1-978-750-8400 FAX 1-978-646-8600